

第2部はじめに

イギリス社会的企業研究20年を振り返って

研究所理事長・明治大学教授 中川 雄一郎

〔I〕本研究所は、2015年10月31日～11月8日にかけて「イギリスにおける医療・福祉と社会的企業視察」を実施した。今回は、2011年11月3日～11日に実施されたドイツでの「非営利・協同の医療と脱原発の地域電力事業視察」と、2013年10月26日～11月4日に実施されたイタリアでの「医療・福祉と社会サービス視察」に続く視察である。前2回の視察には「医療」あるいは「医療・福祉」の視察テーマに加えて「脱原発の地域電力事業」（ドイツ）および「社会サービス」（イタリア）という特別テーマをそれぞれ設定したので、今回のイギリス視察にも「医療・福祉」テーマに加えて「一つの特徴的な視察テーマ」を設定した。「社会的企業」がそれである。

「社会的企業」というテーマ設定は、言うまでもないが、イギリスにおける「医療」や「福祉」あるいは「非営利・協同」や「社会サービス」の現状を、実践的のみならず、政策的、理論的、理念的な観点から視察し考察することを示唆している。今回の視察も、その意味で、「複眼的な視察」ということになろう。かかる視察については、調査団長の八田英之氏によって包括的に言及されている視察報告書「イギリスの医療・福祉と社会的企業視察の総括」、各視察参加者による社会的企業インタビュー「社会的企業視察報告書」（Age UK, Sunderland Home Care Associates, Gentoo, Flower Mill, Space 2, The Box Youth Project, Sustainable Enterprise Strategies, and Account 3）、それにイギリスにおける医療・福祉に関わる政策や理念、そして現実についての石塚秀雄氏の分析「イングランドのNHSのファンデーション・トラストの構造」と「非営利住宅供給会社とコミュニティ開発：イングランド、サンダ

ーランドのGentooの事例」、そして熊倉ゆりえ氏の「英国社会的企業のインフラストラクチャー組織『SES』の現況」に基づく社会的企業の現状分析が明らかにしているところである。

ところで、私は、このイギリス視察が計画され始めた時点では「参加」を決め込んでいたが、3月、9月そして10月と3種の手術・治療を受けることになってしまい、イギリス視察への参加を体力的に諦めざるを得なかった。何しろこの視察には、私が2002年から本格的に開始した「イギリス社会的企業の定点調査」による研究成果が何らかの役に立つだろうと密かに思っていた「社会的企業視察」が組み込まれていただけに、「不参加」は本当に「残念」の一語に尽きる。そこで竹野ユキコ氏が気を利かせてくださって、第2部に私の出番を作ってくくださった。「粋な計らい」という外ない。本当に「感謝」の一語に尽きる。「イギリス社会的企業研究の20年を振り返って」がそのタイトルである。

〔II〕まずは「なぜ『20年』なのか」を説明しておこう。「社会的企業」(social enterprise)として今では、イギリスは言うまでもなく、西ヨーロッパ諸国や日本でもその名を知られるようになった「アカウント3」(Account 3)に、私は、少なくとも日本では誰よりも早く「触手を伸ばした」からである。1996年の2月末から3月初旬にかけてのことである。それにしても、「偶然こそ人生」だと私はつくづく思うのである。

私がアカウント3にその触手を伸ばすには——大袈裟に言えば——「前史」があった。「前史」とは、前年の1995年にマンチェスターで開催された「ICA(国際協同組合同盟)100周年記念大会」に協

同総研の一員として参加したのであるが、実は、私は、ICA 記念大会の3日前の2日間を使って開催された「国際協同組合研究大会」の合間を縫って、当時リーズに置かれていたイギリス労働者協同組合運動の連合組織「ICOM」(「産業共同所有運動」Industrial Common Ownership Movement)本部を訪ね、ワーカーズコープの文献・資料を購入した際に、ICOMとThe Open Universityの共同作成による「イギリス協同組合企業名簿・1993年版」(Co-operative Businesses in the UK・1993 Directory)を無料でいただいた。そして私は、マンチェスターに戻る列車のなかで、その名簿の「コミュニティ・サービス(チャイルドケアを含む)」の欄の最初のページに「女性のための職業訓練・雇用サービス」(Training and employment services for women)を目的とする、と記されている「アカウント3」を発見した。私にとって「女性のための」という言葉が印象深かったことを覚えている。その名簿は、ロンドン広域地区(Greater London)から始まり、しかもアルファベット順で団体組織を紹介しているので、アカウント3は(コミュニティ・サービス欄の)最初のページの一番目に掲載されていた。「事実は小説より奇なり」で、私は日本に帰ってSES(当時の名称はSocial Enterprise Sunderland)をその名簿に見ることになるのである。

私は、ICA 記念大会に出席され、協同組合原則の「第3原則：組合員の経済的参加」についてワーカーズコープの立場から報告された富沢賢治先生からICA 記念大会の内容を教えていただいたので、今後の協同組合研究にあっては、生協や農協だけでなく、コミュニティ・サービスの事業組織を含むワーカーズコープ(労働者協同組合)もまた考察することの重要性を、それもイギリスのワーカーズコープ全体の動向を把握しておくことの重要性を再確認したので、早速、アカウント3へ「資料提供のお願い」の手紙を送り、間もなくトニー・メレデューさんの名前で資料が送られてきた。この上なく「嬉しかった」ことを思い出す。

1997年8月に北海道の大学で研究・教育に活躍していた大学院時代の先輩が「肺がん」で亡くなり、大学から彼のために「追悼論文集」を刊行す

るので追悼論文を書くようにとの要請があった。再び言うけれども、「事実は小説より奇なり」で、私は追悼論文として、トニーさんが送ってくださった資料を基に「コミュニティ・ケアと協同組合：イギリスの事例から学ぶ」を書いたのである(『産研論集』No.2、札幌大学経営学部付属産業経営研究所、1999.3)。私とトニーさんとの本格的なお付き合いは、2002年に私や柳沢敏勝先生など「社会的企業研究グループ」がSESへの訪問・視察を終えて、ロンドンのアカウント3を訪問・視察した時からである。そして私は、その後ほぼ10年にわたって、アカウント3とSES(現在の名称はSustainable Enterprise Strategies)を訪問・視察し、論文・書籍を刊行するための資料・文献を双方の社会的企業から入手してきたのである。

[Ⅱ] すぐ前で述べたように、私の「社会的企業研究」は1996年の「アカウント3」の事例研究が最初であるが、実は、例のICOMとOpen Universityによる先の「イギリス協同組合企業名簿」に記されていたように、この時期のアカウント3は社会的企業をまだ名乗ってはいなかった。周知のように、イギリスで「社会的企業」の名称が一般化される契機は、1997年の総選挙で歴史的な勝利を得たトニー・ブレア政権が、失業、貧困、犯罪など「社会的排除」(social exclusion)に対処する政策の一環として立ち上げた重要政策、とりわけ「雇用創出」と「公共サービス」に関わる社会的企業の政策であった。

労働党政府による社会的企業への支援策とそれによる社会的企業の発展は、EU(ヨーロッパ連合)のみならず、日本の協同組合ビジネスやコミュニティ・ビジネスとNPOや社会的企業の研究に影響を及ぼした。しかしながら、それまでの日本におけるNPO研究はアメリカ型NPO研究が中心であって、それに対応してか、社会的企業研究もアメリカ型社会的企業研究が少なからざる比重を占めており、営利・非営利の区別なく「地域に利益をもたらす」という価値基準による企業化が追求されているように私には思えたのであるが。

それはさておき、私の社会的企業研究歴は次のようなものである。簡潔に述べて、私の「イギリ

ス社会的企業研究20年」の回顧を閉じることにしよう。

私が私の協同組合研究に生協や農協といった従来の協同組合研究に、新たに労働者協同組合（労協・ワーカーズコープ）研究を加えた理由の一つは「イギリスにおけるキリスト教社会主義研究」であった。在外研究のために1985年にイギリスのブラッドフォード大学（Peace Studies）で招聘研究員としてお世話になり、ひたすらキリスト教社会主義者の協同組合思想と運動を研究し、彼らの目標がワーカーズコープの発展によるイギリス社会の福祉的向上であることを知り、協同組合の事業と運動の「何であるか」を改めて認識したことである（『キリスト教社会主義と協同組合：E. V. ニールの協同居住福祉論』日本経済評論社、2002年）。現在の協同総研に足を踏み入れ、お世話になっているのもこのことと大いに関係がある。

次に私は、イギリスにおけるコミュニティ協同組合を追究して、それらが雇用の創出と地域コミュニティの改善とをどのように追求しているかを理解しようとした（『労働者協同組合の新地平：社会的経済の現代的再生』（第3章）日本経済評論社、1996年）。またワーカーズコープの「真の実力」を多面的に知るために、モンドラゴン協同組合について勉強し、そのためにグレッグ・マクラウドの *From Mondragon to America* を『協同組合企業とコミュニティ：モンドラゴンから世界へ』（日本経済評論社、2000年）とのタイトルで翻訳した。

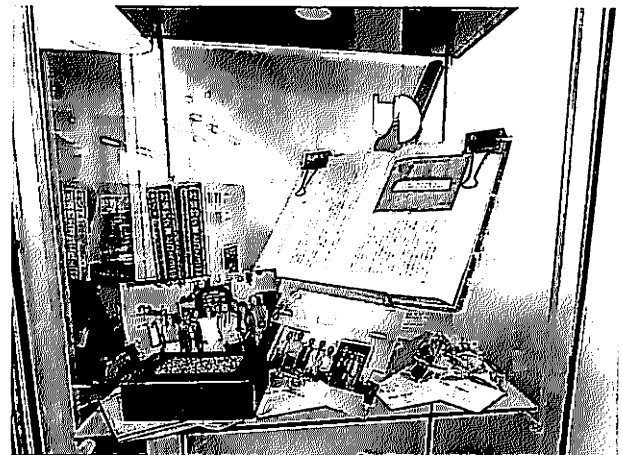
しかしながら、何と云っても、私の社会的企業研究では『社会的企業とコミュニティの再生：イギリスでの試みに学ぶ』（大月書店、2005年）とその「第2版」（2007年）が歴史的な視点と実践的な視点から社会的企業に迫っているし、またシチズンシップ（論）も加味していることから、それなりの体系を成していると言えるかもしれない。特に第2版は、障害者の社会的企業である「イギリスのソーシャル・ファーム：社会的企業としての課題と展望」を加えて「増補版」的な内容になっており、私のイギリスでの社会的企業の訪問・調査の一応の締め括りだと私は思っている。

最後に『非営利・協同システムの展開』（日本経済評論社、2008年）のなかで、私はSHCAを取り上げた、SESの新たな事例研究を論じており（（第5章）社会的企業のダイナミズム：イギリス労働党政府の戦略と社会的企業サンダーランド）、その点でも、SESへの訪問・視察が叶わなかったことを「返す返すも残念」の一語をここで付け加えておきたい。

なお、ここでは社会的企業研究に関わる書籍（すべてではない）を示しておいたが、私の社会的企業論のいくつかの論文とトニーさん自身によるアカウント3の講演録「アカウント3とソーシャル・インクルージョン」（2009年10月、明治大学リパティタワー）などにも言及すべきであったが、紙幅の都合で割愛し、次の機会に譲ることにさせていただきます。



SESからは来られなかった中川理事長に渡してほしいとプレゼントが用意されていた



SES ロビーには『社会的企業とコミュニティ再生』等が展示してある